
ニガヨモギと行商人

旗守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニガヨモギと行商人

【Nコード】

N0994BA

【作者名】

旗守

【あらすじ】

中世ヨーロッパ風ファンタジーの世界観で活躍する女性行商人の話。

自分の仕事について悩んだり喜んだり、等身大な話を目指しました。

木枯らし吹きわたる平原を切る一本の街道。

その道をのろのろと進む一台の馬車があった。

曳いているのは一頭の大柄なラバだ。鞭で叩かれるたびに不満そうな声をあげている。

「ハイヨー、ニガヨモギ！」

ラバを打つのは女性だった。厚手の上着をはおり、首にはあまり暖かくなさそうな麻布が巻かれている。メガネをくいつと上げると、同時にずずーつと鼻もすすった。

「もつと速く速く。こんなクソ寒い日に何回尻を叩かれりや気がすむのよあんたは……」

ニガヨモギと呼ばれたラバは白い息を吐きながらだるそうに頭を揺らしている。

ひよつとすると、鞭で叩きすぎて尻の皮が厚くなったのではないか。彼女はラバの尻をにらみながら鞭で叩いた回数を思いかえしていた。彼女の名はアリン・アクス。商会という商業組織に属するしかない商人だ。自分の店を持っていない、いわゆる行商人で、商会から命令されるままに末端の仕事をこなす日々を送っていた。

今回も商会の命令で、都市から2マイル離れた農村の酒場へ商談を持ちかけにいくところだった。

馬車はのつたりのつたりと進み、だいぶ経ってから目的地に到達した。

「おお、見えてきたあ……」

彼女は寒さに手をすり合わせながら独りごちた。

村の入り口に門はなく、馬車は境界とおもわれる木造のアーチをくぐった。街道がそのまま村道に変わる。

いまは小麦の種蒔きの時期で、家の外に出ている村人は多かった。

何人かは顔を上げてこちらを見たが、脅威になりそうもない一台の馬車だとわかると、それ以上は関心を示さなかった。みな陰鬱な表情で、仕事に没頭している。

手が空いているのは子どもたちだった。

彼らは数人でかたまつて、種籾をとったあとの穂でつくった人形かなにかを、みんなで担いで駆けまわっていた。

「おおい、子どもたち」

アリンが呼ぶと、彼らは興味深々な様子で駆け寄ってきた。歳は5〜12くらいまでいそつだ。みんな青白い顔で、頬は少しこけていた。

「なあに？」

「この村の酒場に行きたいんだけど、どこにあるかわかるかい？」

「だめだ、おしえられない」

一番年長と思われる少年がはつきりとした口調で言った。

「だれだか知らない人には、村のことをおしえられないよ」

「そつだね、ごめんごめん。自己紹介くらいしなきゃね」

女はふところから羊皮紙をとりだして、ひろげて見せた。

「あたしは行商人のアリン。今日はこの村の酒場に商いの用があったってきた」

羊皮紙に書かれた内容は、アリンの身の上を証明するものだった。

子ども相手には仰々しい挨拶だが、ひそかにこのやりとりを見まもっている大人たちに伝える意図もあった。

来訪者が「行商人」だと知った子どもたちは表情を変えた。顔を見合わせ、なにやらひそひそと囁き合う。

「ぎょーしょーにん……」

「しょーかいのてさきだ……」

アリンは内心で苦笑した。あまり歓迎はされていないようだ。

去年から気温が低く、土が弱っており、ほとんどの農村で小麦が不作だった。農民が貧窮にあえぐなか、金と品物を右から左に流す『商人』という人種は、嫉妬や反感を含んだ目で見られるようになって

ていた。そういう感情は子どもがもつとも敏感に反映するものだ。場所を聞くことができたアリンは馬車をそちらへ転回させた。彼女はそつとふり返ってみた。見送る子どもたちの表情には精いっぱい敵意が感じられた。

子どもたちに言われたとおり丘をこえると、酒場と思われる建物が見えてきた。

酒場であることを表す、蔦がからみあう模様の看板が掲げられている。

店のかたわらには檜の木が生えていて、屋根が落ち葉で覆われている。

アリンは酒場の前に馬車を止め、檜の木にラバを繋ぎはじめた。

その間じゅう、ニガヨモギは頭を持ち上げて、何かを探るようにしきりに鼻を鳴らしていた。

アリンはそれに気づいて、ため息をついた。

「まったく、あなたは本当に酒が好きなんだから。ラバでよかったわよ。人間だったら、きつと、飲んだくれのとんだろくでなしなんでしょうね」

アリンは轡の縄をかたく木の幹にむすぶと、入り口前の段を上った。扉をひらくと、閑散とした風景が目飛び込んでくる。店内は酒場としては普通のひろさで、丸卓が3つ、カウンター席が6つある。

客はひとりもいなかった。

「いらっしやい」

愛嬌ある雰囲気の女性がアリンに対応する。

この店の女将のようだ。店内にはこの女性と、店主と思われる男の二人しかいなかった。男のほうはカウンターの奥で黙ってチョコッキを洗っている。

夫婦で切り盛りしている酒場なのだろう。農村では典型的なスタイルだ。

「見ない顔ね。旅の方かしら」

「いえ。ここには客としてきたんじゃないんです」

「どづいつこと?」

アリンはふところからさっきの羊皮紙をとりだし、ひろげた。

「商会の使いできた行商人のアリンというものです。こちらには商談の用向きできました」

女将は顔色を変えた。カウンターの奥にいる店主も顔を上げる。

アリンはもう一枚の羊皮紙を取り出すと、丸卓の上 に置いた。

「お宅のビールをすべて買い取らせていただきたいと思います。ここに記された金額でね。今年の冬は問題なく過ごせるでしょう。その代わり、今後はずっと、都市の酒屋で造っているビールを買い取ってもらいます。その代金はビールの原料である大麦で支払ってもらおう。それが契約内容です。なお、この店が経営不振におちいったときは、商会で資金的な援助をさせていただきます」

小麦が不作な一方で、ビールの原料になる大麦は生命力が強く、収穫量は例年どおりで、ビールもいっどおりの量を作ってしまった。収

農民たちが税に納める小麦が足りずに、たくわえていた貨幣を手ばなしている現状で、村民を相手にほそぼそとやっている村の酒場は、どこも悲惨な状況だった。

こういう場合、その地域の領主が酒場を援助したり、税自体を減らしたりするのが通例だ。しかし、ここ2、3年つづく戦争への出費で、領主たちも資金難にあえいでいた。

そこへ不作が重なって、村の酒場は見捨てられたも同然だった。

たすけられるのは富を有した勢力だが、それが不幸にも商会という利益第一の組織だった。彼らはタダでは村の酒場を助けない。売れ残っている酒を買いとる条件として、自分たちのあつかう商品である都市のビールを永続的に売りつける約束をさせようと考えたのだ。その思惑は、いまアリンがもちかけている契約の内容にもり込まれていた。

「その、今後というと……?」

「ずっとです」

「これからずっと？」

「はい」

返事は是か非か。アリンは二人の反応をうかがった。他にも何件か酒場をまわったが、この契約を救いの手とよるこんで快諾するところと、そうでないところがあった。後者は古い歴史を持つ酒場に多かった。

ここも百年近く前からこの村にある古い酒場らしい。

女将は卓上の契約書を手に取り、何度も読みかえしている。主人のほうはアリンを、彼女が商会から使わされてきた行商人だと名乗ったときから睨みつけていたが、

「出ていけ！ ごうつくばりの、商会の手先めが！」
ついに口を開いた。

「そんなふざけた契約を結べるか！ おまえら都市の酒場や商会は村の酒場をなんだと思つてやがるんだ！」

洗っていたジヨッキを乱暴に置いて、ドカドカと歩みよってきた。隆々とした肩をいからせ、顔は怒りにゆがんでいる。

その氣勢にアリンは思わずのけぞった。

「待つて」

女将がこちらに背を見せて、間に立った。

「私はこのお話、受けさせてもらおうと思つわ」

「何だと!？」

アリンが予想外の展開に驚くなか、2人はにらみ合った。

「この契約を結べば、あたしたちも無事に冬を越せて、これからも店を続けていけるわ」

「お前、この商人の話聞いてなかったのか！ 一度契約を結んじまったら、もうウチでビールは造れねえ！ 都市で造ったビールを売るだけの、ただの販売所になつちまうんだぞ！」

「それがなんなの、あたしらでやってる限りは、あたしらの店よ！」

「お前はあとから嫁に来たからわからねえんだ！ 店をそんな風にしちまったら、死んだおやじとじいさんに顔向けできねえってん

だよ！」

「このままここを潰すか、あたしらが死んだかした方がよっぽど顔向けできないわよ！」

旦那のほうはおそろしい形相で黙った。言葉のかわりに荒々しい鼻息を噴出した。反論の言葉が浮かばないらしい。どうやら決着がついたようだった。

「勝手にしろ！」

彼は吐き捨てる、背を向けてどっかと椅子に座った。

「どうせ倅どもは上から下まで戦に引っぱられて帰ってきやしねえ！ どの道お終いなんだ！ 好きにすりゃいいさ！」

その言葉を聞いた女将の背中、かすかに震えたようにみえた。

店内に沈黙が降りる。

しばらくたってから、彼女はこちらを振りかえった。両目には少し涙を溜めていた。

「アリンさんて言ったっけ」

「はい……」

「ビールは地下の倉庫に貯蔵してあるの。ついて来て」

女将はカウンターの裏にある扉を開ける。その奥はトンネルが穿たれ、石段が下の扉へ続いていた。

「ごめんなさいね、怖がらせちゃって……」

段を下る途中、女将が口を開いた。

「いえ、慣れっここですから、職業柄で」

「そう、ならよかった。あの人も悪気があつたわけじゃないの。これまでね、親戚やら友人やらの当てを駆けずりまわって、なんとかお金を工面しようとしたのよ。でも、戦争に不作にで、やっぱりどこも余裕がないでしょ」

彼女は悲しそうに付けくわえた。

「だから、本当にあなたが来てくれてよかったのよ……」

下の扉をひらくと、刺すような冷気が這い出てきた。アリンは背すじを震わせた。

「この倉庫は石造りでね。ものすごく寒くなるのよ」
女将が腕をしきりにさすりながら言った。
ふたりは震える足を踏み入れる。

倉庫の中には、四方の壁が埋まるほど大量の樽が積まれていた。

「それにしても、こんなに寒くなってちゃ、ビールもダメになってるんじゃないかしら……」

女将は積まれた樽を見まわして、白いため息をついた。

「全部で100樽くらいあるけれど……これらを全部、どんな状態でも、商会で買い取ってくれるのよね」

「ええ、もちろんです。とりあえず、私が10樽ほど商会に持ち帰ります。契約が成功だとわかったら、別の商人が残りの樽をとりに来ますから。その商人にさっきの契約書を見せてください」

「よかった。それじゃ、運び出すのを手伝える男の人を呼んでくるわね」

女将はホツとした様子で倉庫を出て行った。

扉が閉まるのを確認して、アリンはふうつと長い息をついた。

「はあ、さっきのは怖かったなあ……」

職業柄。

自分で言うておいて呆れる言葉だった。

たしかに、商談の相手に怒鳴られたり、脅されたりすることは珍しくないが、いつまでも慣れることはなかった。怖いものは怖いのだ。寒いせいもあるのだろうが、一人きりになったアリンの両膝は、くつくつと笑いはじめていた。これからひと仕事あるというのに。気持ち落ちつかせなければ。

アリンは手ごろな樽に腰をおき、ふところから煙管と煙草をとりだした。彼女には、もはやこれが欠かせなかった。

草をひとつまみ煙管に詰めて、人さし指にポツと火を灯した。せこくて便利な魔術。彼女の魔力ではこれが限界だった。

火が草に移ったのを確認すると、アリンは煙管の先をくわえた。

「不つ味い……」

おもわず煙を吐きながらぼやいてしまう。

「やっぱ、安物はだめだねえ」

なかなか消えない白煙の息を、アリンはぼつと眺めていた。

「行商人だ。」

「商会の手先だ。」

「出ていけ！」

言葉が彼女の脳裏を過ぎっていく。

「どうせ倅どもは上から下まで戦に引っ張られて、帰ってきやしねえ！ どの道お終いなんだ！」

「あの人も悪気があったわけじゃないの。」

「本当は、あなたが来てくれてよかったのよ……」

「……おっと、いけない」

アリンは目尻からこぼれて頬を伝うものに気づくと、あわててそれを拭った。

拭いながら、暗い気持ちになっていく自分に気づいてしまった。

「だめだなあ」

どうしても、感情移入せずにはいられない。心を傷まずにはいられなかった。あの人たちが苦しんでいるのは商会のせい、自分のせいでもある。商人というのとはときに非情でなくては、筋が通らないのに。

「向いてないのかなあ、私」

煙と一緒に弱音を吐いていると、ギーッと倉庫の扉が開いた。

「連れてきたわよ」

女将に続いて、のそのそと大柄の男がふたり入ってきた。

「よっしゃ！」

アリンはわざと元気そうに腰をあげた。

「とつとと済ませちゃうか！」

作業は単純だった。アリンたち女性陣で、樽をかかえた男二人を先導する。彼らは太い腕を樽にまわして一人でひとつ抱えているので、前が見えない。ひよこひよここと石段を上がり、酒場の中を横切つて外に出る。

先頭の男が酒場の扉をくぐった直後。ゴン、というくぐもった音が聞こえた。

「止まって！」

アリンはとっさに男たちに指示を出した。樽がどこかにぶつかつたかと思つたのだ。

しかし、男2人は樽をかかえて立ち止まっているのに、またゴンと音が鳴つた。

二回目の音がなつたときに、アリンはその原因を目の当たりにした。どこからか石が飛んできて、ゴンと樽に当たつたのだ。

「でてけ、でてけ！」

「じつじつくばりい！」

振り向くと、さっきの子供たちだった。

手に手に石をつかんで、小さい歯をくいしばってこちらに放つてくる。

「こら、やめなさい！」

アリンが樽をかばうように立って、子供たちを諫めたが、むしろ投石の勢いは増すばかりだった。

「でてけ！ でてけ！」

「きやあ！」

拳大の石が彼女の側頭をかすめたときだった。

「こらあ、ガキどもお！」

怒鳴り声が聞こえた。

子供たちは表情を一変させると、ひるがえって駆け出した。そのあとをいかつい体躯が追いかける。酒場の店主だった。悪ガキどもを追い散らすと、慄然とした顔で戻ってきた。

「とつとつと運んじまつてくれ」

そういつた直後、彼は少し目を見ひらいた。

えっ、と思ったアリンが視線を追って振りかえる。

「うわあ、この樽、穴が空いてまさあ！」

見れば、男のひとりが抱えた樽から、ビールが滴っていた。

「大変！」

もともと傷んでいた樽を、運んだり、石をぶついたりしたものだから、木と木の間に隙間が空いてしまったのだろう。

「代わりの器を持ってくる！」

主人と女将があわてて店内に戻る。

アリンはあわてて指示を出して、樽をいったん地面に置かせた。空いた隙間を上に見たが、今度は別のところから漏れでる始末だった。

三人の人間があたふたしている、木につながれていたラバが鼻を鳴らした。ニガヨモギはビールの匂いをこれみよがしに嗅がされ、獣なりの我慢の限界だった。

このラバは一度思い立ったら、縄の束縛など関係ない。持ちまへの怪力で、麻の縄をひきちぎってしまった。

そうして堂々と足を運び、三人のあいだに太い首をつっこむと、ぴちやぴちやとビールを舐めた。

「こらニガヨモギ、やめなさい！」

このラバは酒の中でも特にビールが好きだった。しかも、今回の食いつきときたら尋常ではない。

アリンが思いきり尻を叩いても、しっぽや耳を引っぱっても動かない。いつもとビールを舐める勢いがちがう。男たちも加勢して、なんとか身体を引きはなした。

すると首が伸びて、なんと舌まで伸びる始末だった。

こいつの舌はこんなに長かったのか。アリンは内心で呆れてしまった。

「やめなさいって！ あんたが酔っぱらったら、あたしはどうやってビールを運ぶのよ。やめなさい……」

だが抑止もむなしく、しまいには男たちも、漏れるビールを手尺ですすり出すありさまだ。

「うめえ！」

「このビール、ずっと放ってあったのにうまいぞー！」
アリンは憤慨して叫んだ。

「あんたたち、これは売り物なのよ！ 呑むんなら金払いなさいよ！」

「いやあ、でもこれ、本当にうまいんだって！」

「あんたも騙されたと思って飲んでごらんよ」

彼らの表情や態度は、心底からおどろいているように見えた。

アリンは半信半疑ながら、自分も飲んでみることにした。どのみち、ここまで漏れ出てしまっただろうししょうも無い。どうせ二束三文の価値もない間の抜けたビールだが、地面に飲ませるよりはいいだろう。

彼女はなげやりな気持ちで、漏れでているビールを手尺で受けとめた。

手の平にシューっと泡立つ感触を伝える液体。それに、口をつける。

その瞬間。

彼女は思わず目を見ひらいた。

「なんだこれ……！！」

はじめて飲むビールだった。はつきりと芳ばしい麦の風味がする。ごくりと飲みこんでからのあと味は、なんとも言えずさわやかだ。夏の青空の下で、風を受けて黄金色に波たつ、あの一面の麦畑を想像せずにはいられない。そんな味だった。

もう一回すすってみる。

うまい。いくらでも呑める。

いや。

呑んでいる場合じゃない。

アリンは立ち上がると駆け出した。

器をかかえて酒場から飛びだしてきた夫妻と衝突しそうになる。

「あ、あの」

驚く二人になんとか伝えようとするアリン。

「このビール、商会でなく私に売っていただけませんか？」

「は？」

「なんだと？」

アリンはひと呼吸おいて落ち着きをとりもどし、今度は決然とした表情で、夫妻と向き合った。

「お願いします！ 絶対に損はさせません。この店のビールを守っていけるかもしれないんです！」

夫妻は顔を見合わせた。

このビールを呑んだとき、衝撃とともに、アリンの頭の中にはすでに計画ができあがっていた。

アリンは夫妻に約束をとりつけると、できるだけ早くたどり着くように、1樽だけ馬車に積んで都市へ戻った。

そこで商会には向かわず、友人のビール鑑定人のもとにおもむき、このビールを試飲させた。

その友人は一口呑んで、信じられないという顔をした。

「うまい！ こんなビールは今まで味わったことがないぞ！」

彼の話では、この味の良さは、ホップなど薬草の調合によってではなく、醸造の過程でもたらされたのではないかということだった。

おそらく、今年の寒冷化など、気候の変化が関係しているのではないかという分析だった。

「このビール、どこで手に入れたんだ？」

「残念。それは秘密よ」

アリンは、あの村の酒場にビール醸造ギルドの職人や商人などが大挙して押しよせるのを想像して、絶対に情報は明かさないと決めていた。もともとが偶然にできたビールだ。今年かぎりの奇跡でも、

来年以降も寒冷化が続いてずっとこんなビールができるのだとしても、自分がうまく仲介をして、売りさばいていければいい。

これは商人として成功するためのビッグチャンスだ。これからへの期待と興奮に、アリンは頭がのぼせそうだった。

商人に向いていないなんて、いまにして思えば大嘘にしかない。アリンはふふふつと笑みがこぼれてしまい、友人の鑑定人に気味悪がられるのだった。

つぎにビールの買い手を確保するために、彼女は都市で行きつけの酒場“躍る小鹿亭”を訪れた。

いきなりビールを売り込まれ、最初は戸惑ったその店主も、一口呑んだだけでこのビールを気に入ってしまった。

アリンはその時点で、店のカウンターで羽根ペンを走らせ、もってきた樽と、のこりの98樽のビールもここ”躍る小鹿亭”で買い取るという内容の契約書をしたためた。そこには、このビールの売り手についての情報を機密にするという条件を付けるのを忘れなかった。主人は上機嫌でそれを承諾した。商売敵にわざわざ教えてやるものか、と笑った。

値段は交渉のすえ、1樽につき金貨1枚となった。合計すると金貨100枚もの大金だった。

通常のビールなら1樽につき銀貨1枚が相場だ。

金貨は銀貨に対して10倍の価値を持つので、このビールは通常より10倍の価値があるということだった。

都市の酒場は羽振りがいい。村の酒場とちがって儲かっている。単純に金を持った客があつまりやすいという理由があるが、それによって都市の貴族や有力者と関係がふかいということもある。ほとんどの酒場は、戦争地へおくる酒や食料を売りこむ契約を、貴族たちとむすぶことに成功していたのだ。

この”踊る小鹿亭”もそんな酒場のひとつだった。

「もうすぐ戦争が終わるんだ。だから戦地に美味しい酒をうんと贈ってやりたいと思ってね」

「てことは……？」

「俺たちの国が勝ったんだよ。北の蛮人どもを荒れ地に追いかえしたんだ。国境の長城で籠城戦だったから長引いたけど、けつきよく門はひとつも破られなかつたらしい。こっちの戦死者は数えるほどしかないそうだよ」

アリンは村の酒場にもどると、さっそく戦争に関する情報を夫妻につたえた。

ふたりは息子たちの生存に希望が持てたことをなによりも喜んだ。自分たちのつくったビールが戦地の人々を祝うのに役立つのもうれしいと、アリンに何度も礼を言った。

輸送用の馬車隊は、積んできた樽にビールをうつしかえて直に戦地へおもむくことになっていた。

馬車隊が輸送の準備をしている間に、アリンは夫妻に、代金として金貨80枚を支払った。彼女は手数料として金貨20枚をふところに収めているのだが、それを差し引いた金額にも夫妻はひどく驚いてしまった。

「本当にいいの？　こんな大金を……」

「ええ。それだけの価値があるということですから。今後もこのビールを買わせていただくことがあるかもしれないので、そのときはよろしく」

支払いの確認が終わったころ、ちょうどビールの積みかえも終わったように、外で合図が聞こえた。

「じゃあ、私はもう行きますね」

そう言うと、アリンは踵をかえした。

「行くって？」

「馬車隊と一緒に国境付近の都市まで行くことにしたんです。お金も手に入つたし、そこで新しく自分の店を開こうと思っているので」

「まあ、そうなの……」

「それじゃ」

酒場の扉に手をかけたアリンの背中に、

「待つてくれ」

太い男の声がかけられた。

終始だんまりしていた主人が口をひらいたので、アリンと女将は驚いて彼を見た。

相変わらぬのいかり肩でズンズンと歩みよって、少しひきつった顔で見あげるアリンに大きな手を差し出した。

「なんだかんだあつたが、結局あんたは俺たちにとって恩人だった。不思議な巡り合わせもあるもんだ。ありがとうよ。あと、怒鳴ったのは、すまなかつたよ」

アリンは一瞬、きよとんとしてしまった。

すぐに表情をやわらげると、かたく手を握りあつた。

アリンの馬車は輸送隊の最後尾につき、街道を北へ向かっていた。

国境地帯を指す長い道のりだった。

「ハイヨー、ニガヨモギ！」

アリンはいつものようにラバの尻をムチで叩いた。

ニガヨモギという名で呼ばれるこのラバは、不満そうにひと声鳴いた。

アリンははるか前方の地平線を見すえた。

あらたな地で、あらたな生活が待っている。

国境付近は戦争の影響で、人やものやカネが集まっているはずだ。

そういう地域は、政治的にも経済的にも発展がうながされる。つまり商機の気運に満ちているということだ。アリンはいまから、期待と不安に胸が押しつぶされそうだった。

だが、まずは目下の問題から対処しなくてはならない。

「遅い！」

アリンはふたたび、ラバの尻にムチをいれた。

「速く速く！ このままじゃ馬車隊に置いてかれちゃうよ！」

いくらムチをくれてやっても、あいかわらずニガヨモギのすすむ速

さは変わらなかった。

アリンは腕が疲れてしまい、あきらめてムチを脇に放った。手にあごを乗せて、ラバの尻をにらみつける。

「覚えてなさいよ。新しい都市に着いたら、もっと強力なムチを買ってやるんだから」

ニガヨモギは彼女の脅しを嘲笑うように、ひっひっひっひつと鳴いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0994ba/>

ニガヨモギと行商人

2012年1月2日07時46分発行